
いつもの服で、山までお散歩。

さすらい物書き

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

いつもの服で、山までお散歩。

【コード】

N6903A

【作者名】

さすらい物書き

【あらすじ】

魔法の靴をプレゼントされた。わたしはその靴を履いて、ふだん着のまま、一人でおでかけすることにした。

いつもの服で、山までお散歩。

いつもの服で、山までお散歩。

魔法の靴をプレゼントされた。

カーキ色、……ベージュかな？ その靴は、何年も生きてる森の木みたいな、きれいな土の色みたいな、そんな感じの色で、形は女の子が履くにはちよつとゴツめだったけど、わたしはとても気に入った。

さつそく部屋の中に新聞紙を広げ、その上で履いてみた。すぐくしつかりしてて、いま持つてるどんな靴よりもしっくりとわたしの足と足首をくるんでいる。

よし。

わたしは一人でおでかけすることにした。

季節は梅雨も明けたばかりの初夏。天気はとってもいい。

この靴を履いていたら、どこまででも歩いていけそうな気がしたので、ちよつと遠出になつても平気なように帽子と水筒を持つてくことにした。

お気に入りの可愛いオレンジ色の水筒は0.5リットル入る。キヤップのところには大きめのクリップみたいな金具がついている。クリーム色のくつたりした帽子もお散歩のときはいつもつれていく。小さくオレンジ色の刺しゅうが入つてて、そこも可愛いのだ。

だけどそれ以外は普段着で とうか着替えはしなかった。

着心地がよくてフードの形が可愛い茶色のパーカ。
涼しげで軽やかな、風にゆれるシフオンスカート。

今日はこの格好に、土色の魔法の靴が加わる。

クローゼットにしまったた、シンプルな形のグリーンのリュックに、タオルと部屋にあったお菓子とくったり帽子と、あと思いついたものを放り込む。

水筒によく冷えたミネラルウォーターを入れて、金具をリュックのショルダーベルトに引っかけた。

さあ、準備オツケー！

「いつてきまゝす」と宣言して、わたしは外へ出た。

さあ出発だー！ お昼前のお日様の光がすがすがしくて、吹く風は背中を押してくれている。だから、すごく身体が軽い。ミドル丈の彩りスカートが楽しげにゆれる。

いや待てよ。この足どりの軽さはたぶんこの魔法の靴のせいだ。アスファルトの上を歩いてるって感じがまったくしない。なんて云うか、ふかふかの厚いじゅうたんの上を歩いてるような感覚なのだ。すっげー。すごいよ魔法の靴。

坂道をのぼるのも軽やか。角を曲がる時にくるっと一回転してみたりなんかしちゃって。歩こう、歩こう。わたしは元気。

魔法の靴の威力は強力だ。ふだん運動なんて全然しないわたしが、半時間近く歩いても少しも疲れない。もっともっと歩きたくなる。

「あ」

思いついちまった。いいアイデアなのか無茶なのかわかんないけど、これなら思う存分魔法の靴のちからを試せるぞ、うん。

わたしが目指したのは、駅。そこから電車に乗って、20分のところにある山。何山だったっけ？ 名前は忘れちゃった。なんとか山まで行ってみたいくなったのだ。

いつもの服で、山までお散歩。

電車に乗ってる20分間。行き過ぎる景色はもうすっかり夏の気配に輝きはじめている。

電車が駅に着いた。まだまだ歩き足りない魔法の靴とわたしは待ちきれずに電車を降り、駅の外へ。

登山口までの案内図を見る。よく考えたら、山登りなんてはじめてじゃん、わたし。わぁお！　なんて実行力！

高級住宅街を抜け、登山道の入り口に到着。木造の雰囲気のあるお食事処（茶屋っていうのかな？）があるけど、いきなり休憩なんていまのわたしには必要なさそう。さあ、いくぞ〜！

水筒の水をひとくち飲んで、くったり帽子を取り出してかぶる。

茶屋の先をしばらく歩き、登山道を進んでいくと、水の音がきこえてきた。

小川が見える。

この辺りの木々は、川の水をたっぷり吸って育っているのだろう。しっとりした、命に満ちたたたずまいだ。人間も自然も、潤いって大事だよな。

空気がマイナスイオンで満ちてる感じ。思わず鼻から深呼吸。ふだん鼻づまりがちなわたしなのに、今日はまったくつまってない。これも魔法の靴の力の一部なのだろうか。それともお散歩が身体にいいってことなのだろうか？　どちらにしても、素敵なことに違いない。

わたしの他にも登山客はけっこういる。上等そうなカメラを持ってなにやらカシャリとシャッターを切っているおじさんもいれば、意外と若い女の人やカップルもいて、山登りに対して抱いてたスト

いつもの服で、山までお散歩。

イックなイメージが薄らいだ。

これから歩く道がずっと見えている。すごい解放感！

けっこう歩いてるのに、いまだ疲れ知らずな魔法の靴とわたしである。木の柵に沿って、静かな大自然の中の道をどどんと歩く。坂道の傾斜は、まだそんなにハードじゃない。いいのよ遠慮しなくて普段着なわたしだけど、その足には魔法の靴があるんですから。どんと来なさい！

……というわたしの願いが天に届いたのか。いきなり岩だらけのポイントに到着しました。

こ、これは……！ 手袋がないと登れないぞ！ うわぁ、本日初めてピンチ到来だ。軍手なんか落ちてないかな。もちろん、落ちてるわけありません。

しかたないので素手で登り出す。これが噂のロッククライミングってやつなのかな。ちがうかな。

明るい茶色と灰色と白の3色の岩肌は綺麗で上品な感じがする。初夏の日ざしがそんな岩肌にくつきりしたわたしの身体の影を落とす。

両手両足を駆使してはい上がる。ちっちゃい頃は木とか塀とかいるなとこにのぼってたな。そんなおてんばな幼少期の記憶がよみがえる。

少しずつ、疲れてきた気がする。ただこのしんどさは、心地よいしんどさだ。

……よし、のぼり終えた！

リュックのポケットから飴玉を取り出し、口に放り込んだ。

いつもの服で、山までお散歩。

「ロッククライミングゾーン」（わたしが名付けた）を抜けたのか、
こんどは木々や藪が生い茂るエリアに入った。

途中、人の顔をした石を見つかったり、あきらかに「山」という字
の形に伸びた木の枝を見つけたりしながら楽しくのぼっていく。ス
カートが少し汚れちゃったけど、気にしない、洗えばきれいになる。

わたし、このまま山の頂上まで登るんだろうか。

登りきらないと、今日のわたしは満足しない気がする。

視界が開けてきた。

最高のお散歩になった。

坂の傾斜も緩やかで、道の下方には川が流れている。

林の中の道を、木漏れ日を浴びながら、もうわたしはホントに上
機嫌になって、鼻歌まじりで進んでいく。

「極楽ゾーン」（わたしが名付けた）を抜け、また少し登り坂が急
になってきた。

でも、わたしの足元には頼もしい魔法の靴がある。疲れを知らな
い、魔法の靴が。

見晴らしのいいところまでやって来た。

くったり帽子を脱ぐ。

上気したほつぺたと少し汗ばんだ身体に吹き抜ける風が涼しくて
気持ちいい。

おもいつきり、胸いっぱい透明な空気を吸いこむ。

気持ちいい！

こんなにすがすがしくていいんだろうか。吸いこんだ空気のように、
私の身体も透きとおっていくような気がする。

いつもの服で、山までお散歩。

けっこう上がってきてたんだな。高いところから望む景色はきれいだった。手前に茶色の岩肌と緑の森。そのむこうに街が見える。そしてさらにそのむこうに 海。自分ちの方向はわからなかった。

お腹がすいてきた。リュックの中のお菓子をひとつ取り出す。水筒の水で少しうがいをして、そこに腰をおろしてお菓子を食べた。おにぎりが食べたかったけど、ないものはしかたない、我慢しよう。リュックからタオルを出して、汗をぬぐった。

5分ほどの休憩ののち、帽子をかぶって再出発。少し肌寒くなってきた。タオルをそのまま首に巻いて歩く。

木でできた道標が、もう少しで頂上だということを教えてくれた。そうか、あと少しでてっぺんなんだ。

大きな風がびゅーびゅー吹いていて、わたしはくったり帽が飛ばされないよう手にとって握りしめると、山の山頂に立った。

やわらそうな雲と、くっきりとした青い空。

とつても気持ち良かった。

お気に入りの服を着て、ふだんより空に近いところに立っている。

わたしの身体はこんな素敵な場所に来れるんだ。

胸を張って、山のてっぺんの大きな風をおもいきり深く吸いこんだ。

いつもの服で、山までお散歩。

ああ、　　気持ちいい！

しばらくわたしは、山頂の風と景色を楽しんだ。

魔法の靴は、朝うちを出たときと変わらぬたまたまいでわたしの足をくるんでくれていた。

さて、そろそろ下りますか。のほりよりくだりの方がひざとか腰に負担がかかりそうだからきついはず。大丈夫かな？

魔法の靴はまかせとけとでも云いそうな頼もしさで地面をつかんでいるように見えた。

帰りの下り坂でも、魔法の靴はわたしの身体をしっかりとふもとまで運んでくれた。

登山口の茶屋に入ってひとやすみ。食べたかったおにぎりをぱくついて、あったかい緑茶をすすってから、帰路についた。

帰ったら、お風呂に入ろう。だいぶ汗もかいたし。一日がかりでかいた汗を流すお風呂はいつも以上に気持ちいいだろう。

もう夕方になっていた。

自分の家に着き、玄関で魔法の靴を脱いだ。

「あっ」

脱いだとたん、魔法の靴は、すう……っとその姿を薄くしていき、

いつもの服で、山までお散歩。

そして、……消えた。

ありがとう、魔法の靴。素敵な一日をありがとうね。

山のぼりの疲労感が、わたしの身体をつつんだ。

それは、心地のいいしんどさだった。

いつもの服で、山までお散歩。

(後書き)

おしゃれ好きの、でもふつうの女の子が、いきおいで山登りをして
しまうというお話でしたが、いかがだったでしょうか？

読んでいて、家の中とかにいながら外の晴れた空気やおでかけの解
放感が味わえるような作品を目指して書きました。

だけど、この魔法の靴をプレゼントしたのって、いったい誰なん
でしょうね？

その秘密は、作者のぼくも知りません(笑)。

お読みいただきありがとうございます！

いつもの服で、山までお散歩。

いつもの服で、山までお散歩。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6903a/>

いつもの服で、山までお散歩。

2009年7月2日03時58分発行